

「出会い」と「出会いからの解放」

—平金有一著『「染める」—平金有一の軌跡』（「染織と生活社」刊）

山 縣 熙

今年の夏は殊のほか暑かった。

その暑い夏の終り、しかし一向に暑さの衰えない、中でも暑い一日、私はこの作品集とノートを鞆に入れ、知人の車で六甲山頂に涼をとりに行った。

作品集の批評を進んで引き受け、しかしそのとば口さえみつからないまま何日かが過ぎていた。染や織に対する、好奇心以上の格別の知識のない私が、同僚でもある平金有一の、ただその人柄の雰囲気魅かれ、氏の作品集の上梓に際し、その喜びを氏と共有し、その喜びを自分なりに表明しておきたいと思い、この書評を進んで引き受けたというのが本当のところである。そして書評の試みのその作業を通して、氏の人柄、雰囲気に魅かれる自分自身の、その心の在り様の掘ってくるところを、確かなものにしておきたいという想いがあったのも事実である。

六甲山頂の、大阪湾を見渡せるカフェの窓際に座り、神戸市街へと向って谷間を形成しつつ下って行く山並の、稜線と稜線との間にみえる神戸港を眺めていた。瀬戸内の海が光ってみえる。カフェの山側の入口から流れ込み、谷間を海へと吹き降りる、空調のそれではない、やわらかい自然の風が店内を抜けていく。

作品集のページを操る。何度も何度も眺めてきた作品が過ぎていく。

或る作品の前で手がとまる。

『染色屏風「白の起伏」』（図1）である。

作品を実際にみたいと、強く思う。

カフェを出てMさんに電話をする。平金先生とコンタクトをとって欲しいということ、そしてどこに行き、どうすれば先生の作品を拝見できるかをうかがって欲しいということ、そうした連絡を依頼する。



図1 白の起伏、1960

山頂のせいか、携帯電話の電波が時々フェーディングをおこす。その合間に松籟が響いている。谷間の向うに光ってみえる海の、その潮騒にも聞える。

再びカフェに戻り、作品集を開く。

件の『白の起伏』は平金有一の卒業制作である。それは、「大学買い上げ賞」を受けると共に、今は氏の出身校である京都市立芸術大学の博物館に所蔵されていると、作品集にはそう記されている。とすると、この作品そのものをみることはひどく困難に思われる。

作品集にはまたその制作をめぐる難渋が次のように述べられている。

「テーマがクルクルと変わり、かなり苦戦をしていた。動物？松？竹林？……。最後は、南河内の太子町から二上山のあたりを歩き廻り、その風景を題材にしよう

と決めた。(中略) 高低のあるブドウ畑やミカン畑、野菜なども植えられている里山のような起伏が面白かったので、それを題材にした。丘の中腹から上や下を見ての、広い空間を表現してみたくなった。できるだけ大胆にし、説明にならぬように注意し、省略化に努めた。自然の色彩にこだわることは止めて黒と白にし、空を感じる程度のブルーを少し上方に置いた。」

卒業制作を回想する平金有一のこの文章は、その後の氏の制作活動にはもちろん、おそらくはその後の氏の生きる姿勢にも通底してもいないか。それは、自分自身の感動にあくまでも忠実に生き、またそしてその感動にこだわりながら、なおそれでいてその感動を昇華し、それから解放され、自由であろうとすることを意味してはいないか。それは現実を直視することで現実を超えてること、現実を透して非現実を、在るもの向うに無いものをみようとする姿勢を志向してはいないか。

氏はこの姿勢を、人生のごく初期、「国民小学校2年時」満州で迎えた敗戦という経験の中で身につけた。その折の「恐ろしい悲惨な幼児体験」と広大な満州の大地に沈む真っ赤な太陽の「鮮明に美しい残像」とに氏は言及している。盛衰変移する人の世と変異栄枯と関わることなく、ただただ推移する自然の美しさ、それら一見相矛盾する二者が氏の生の核となっている。

後になって芸大受験のために個人指導を受けた際の先生の、次のようなアドバイスを書き記す平金有一の内に、人はその「核」の展開の跡を見はしないか。「白いハンカチを机の上に置いて『これを描いてみなさい』と言われた。描き終えたスケッチを見て『これコンクリートみたいと違うか』とツブヤカれた。『ハンカチの中には空気が有るんや』と手で押さえられた。ハンカチはクチャリとペチャンコになった。メザシを描かされた。『これは噛めんなアー、カチカチや』といって半生の魚をむしり、美味しそうに食べられた。私も食べさせられた。そうか、そんな事が大事なのか——。」今村輝久というこの文中の先生に、私の心もまた魅かれ

はするが、しかしこの話をこのように書き記し物語る、平金有一その人に、私はより強い感動を覚える。人はしばしば自分の経験を書き記し、物語をつくる。しかしその物語として語られた話の内に、われわれ聞き手・読み手がみるのは、語り手の生きる姿勢、語り手の求めている理想像であり、語られたことの現実性への問いではない。今村輝久と平金有一の出会いにおいて、事は実際のところ、あのよう進行してはいなかったかもしれない。だがここではもはや事実の当否は問われない。語り手の騙り、語り手の語りこそが語り手の想いを語っているからである。語られたことよりも、そう語る語り手の心の在り様こそ、より重要な何かを物語っている。

やがて、芸大におけるスケッチの課題で芒を描くに際しての経験を、平金有一は次のように書くことになる。「描写することの大切さとその心構え、何を描いていこうとするのか、何に感動しているのかの、『心の動き』をしっかりと掴むことが肝心だということなのか(略)。要は数本の線で芒の集団が感じられ、その中に風が通り抜けていっているような空間や、動きを的確に把握しているかと、簡略化、様式化の面白さ」が重要であると。

こうした平金有一本人の文章を読み解き、作品集の作品を何度も何度も見返すとき、作品の多様な変化の奥に、変わらぬ平金有一の姿勢とその姿勢に支えられた作品の奥行き、厚み、力などを感じるのは私だけであらうか。ここではもはや具象とか、抽象とかと言挙げする必要は全くない。そこでは具象の極の抽象が自ずと具現し、抽象の中に具象が顕現してみえる。

作品集を閉じ、コーヒーを新しく注文し、携帯電話を見る。Mさんからメールが届いている。電波の状態が悪く電話が通じないのでメールを送ると、そして平金先生はO.K.で、直接コンタクトをとるようと自宅の電話番号が送られてきていた。

再び店の外に出る。Mさんにはメールのお礼を、そして平金先生とはお目にかかる日時の打合せを、それ

ぞれ電話ですませる。午後になって風がまた出始めたようだ。松籟がより強く感じられる。

平金有一その人との、既にもつ出会いとは別に、氏の作品そのものとの出会いの始まりである。

思うに、平金有一の作品世界を読み解くキー・ワードは「出会い」ではなかろうか。そしてその「出会い」を常に可能にするのは「出会いからの解放」という、より重要なもう一つのキー・ワードである。

彼自身その作品集の冒頭「染める」と題した序文を「人生は出逢いだとよく言われている」と書き出している。「出逢いは人であったり、先人が築いた歴史や文化であったり、海や山や樹々、美しい花々など様々である。そして、その出逢いが、その後の生き方にも大きな影響を及ぼす。」

このとき、平金有一にあって、「出逢い」はほぼ「感動」と同義である。今引用した序文に先立つ前言は「感動」というタイトルをもつ。「自然の姿、その生命感に感動を覚え、命の叫びを感じとり、私は自らの感性を磨く。(略)自然の造形の厳しさを学びとり、内面的なイメージとして独自のフォルムを求める。／自然との対峙と出逢いによって、今迄知らなかった己の心の姿を新たに発見し、染色を通して作品制作をすゝめていく。／私の仕事はこれから始まる。」

人はこのとき、そして平金有一もまた、二重の困難に遭遇することになる。それは出会いをめぐる二重の困難、「出会い」を経験することの困難と強い感動を伴うその「出会い」から自己を解放し、その「出会い」から常に自由であることの困難である。しかし平金有一はこれらの困難を困難として意識することなく、天性、乗り越えているように思われもする。だが、それは果たして彼の天性であろうか、それともまたそれは彼が選択した固有の生き方の結果でもあろうか。この問いは重要である。

「出会う」ことの困難とはそのとき、出会いに際し、相手や対象に自己を解き放つことの困難である。出会いの対象を前にして、自己を白紙にするものの困難、

現世の様々な柵を取り除いて相手に接し、予備知識を前提することなく対象を経験することの困難である。人は日々、様々な出会いをもつ。しかしこの日常の出会いを、平金有一の「出逢い」として経験するには、先の様々な困難を払拭し、そこから超え出ることが必要となる。平金有一がこの作品集で繰り返し述べている、理性や知識への消極的否定的態度と直接的感動への積極的肯定的態度は、その間の事情を示唆している。

しかしこの「出会い」の第一の困難の後に、なお次の第二の困難が待っている。この第二の困難は、第一のそれに較べ、より複雑、より深刻であり、それ故、排除・超克することのより難しい困難である。この困難、「出会い」の桎梏から自らを解放することの困難は、先の「出会い」の想い、その感動が強ければ強いほど、しかも他方「出会い」のこの感動は、それがより強くあることが求められ、より強いことをよしとする習性をもつ以上、その「出会い」から自己を解き放ち、その「出会い」から自由になるということは、より一層困難になるという逆説、矛盾を内包する。「出会い」の喜び、感動は、その強度を指標とし、その強度は「出会い」の対象へのより強い執着、拘泥を内包、陰蔽するのが常である。しかしこの執着、拘泥は、次の新たな「出会い」、常なる「出会い」の柵ともなる。

平金有一はそれら困難をいかにして超克したのか。作品には、そうした困難の痕跡はない。

六甲山頂はすでに夕闇に包まれ、空気は肌寒くなっていた。

三日後、大学で落ち合い、ご自身の運転される車で平金先生のお宅へ伺うことになる。仲介の労をとってくれたMさんも一緒であった。途中車内で私は「三島由紀夫の言葉として覚えている」と前置きをして、「処女作を誉めるのは、作家にとって不愉快なことと思いますが」と、先に六甲山頂で経験した、先生の処女作への自分の深い想いを吐露した。素人の私に先生は、2005年9月、伊丹市立工芸センターで開催した個展に際し、その作品を借り出し、近作と並べ、一緒に展観

したが、その折、久し振りにその作品を眺め、自分でもその作品の隠されてある大きさ、強さを改めて感じたと、車を運転されながら、そうおっしゃって、生意気な私の発言を受け入れてくれた。私は内心、お誘いを受けながら、結局は拝見できなかった伊丹での展覧会とその作品のことを思い、後悔の念を強くしていた。「人はこうして出会いを逃がしていくのだ」とも。

車はやがて松原市内の先生のご自宅に到着する。

このようにして私は平金有一の作品世界との現実の出会いをもつことになる。

『白の起伏』からおおよそ20年後、1979年の作品『染色屏風「ヒンズーたち」』(図2)は、平金有一、41歳のときの作品である。

平金有一が初めてインドを訪れるのはこの作品を描く10年前、1969年、31歳の折である。それから氏は、しばしばインドを訪れることになる。『白い起伏』から20年、インドを訪れ始めてから10年、それだけの時間をかけて氏はこの作品に到達する。

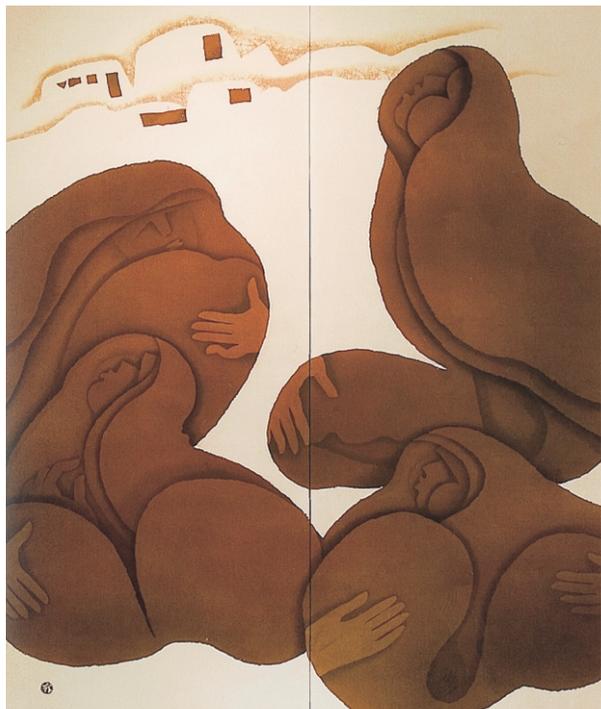


図2 ヒンズーたち、1979

その作品を前にした私の想いは、一言にして「静謐」である。しかしこの静謐は、穏やかに沈まり、鎮まっているという状態の静謐をいうのでは決してない。喧噪、混濁、汚辱の中に、突然訪れた一瞬の空白が生み出す静謐、あらゆる色光の集合が白色を呈するという、そのような静謐である。

平金有一はインドへの旅を「自己再見」の旅と呼び、そこに様々なものの共存、混在をみる。ところで、この共存・混在は、つまるところ、あらゆる人間が己の内に抱えもつ様々なものの共存・混在のことではなからうか。そしてこの共存・混在は終局、生誕から死に到る道を生きる他ない全ての人が内包する「生と死」の渾融に通じるものではなからうか。

初めて訪れたインドの、空港からダウンタウンへと向う夜の道路脇でみた「ヘンリー・ムーアの彫刻のような白い固まり」への驚きを、氏は次のように述べている。「アレは何か？」と尋ねる氏に、通訳は「あれは難民です」と答える。「本当だ、この固まりは人間ダッ。親子が一つの粗末な布を被って寝ている。老人が細い足を出して横たわり、側に若夫婦だろうか、膝を立てて座って、やはり毛布のようなものを肩から掛けてじいっとしてる。異様なものが人間なのだ知った。」

同じインドを旅した作家の野間宏は、駅の中の広場でハンセン氏病の人々や手足を失った人々にまじって、少しも動くことなく死を待つ人々をみた驚きにふれ、「死を恐れることなく、死を待っている人々の身はやすらかで、そして軽々とした時がそのなかに埋められているかのようなのである」とも書いている。

先に引用した文章に続いて、染織家平金有一は「たった一枚の大切な布で身体を覆い寒さを忍んでいるかと思うと、胸がジーンとなってきた。一枚の布の固まりが、ヘンリー・ムーアの彫像みたい——。私は無意識のうちに何枚かのスケッチをしていた」と書く。『ヒンズーたち』(図2)はこの出会いのスケッチから生れることになる。そして今、私はこの作品との出会

いをもつ。別のところで平金有一は、ヘンリー・ムーアの作品集との、若い日の出会いについて語っている。

人は様々な出会いをもつ。その出会いを「出会い」とするには「こちらのアンテナを常にピカピカに磨いておかねばならない」、そうでなければ「感度が弱いため、どんなに良い人に出会っても相手さんは通り過ぎてしまう。出会いのチャンスは先方さんからはやって来ない」と、これは平金有一の託宣である。このとき先の問い、二重の困難を困難と意識せず乗り越えているとみえた平金有一への問いの答えは自ずと明らかになる。その乗り越えは結局、彼の天性にもよるとして、なおまた平金有一本人に固有の選択の結果でもある、ということになるのではなかろうか。

『ヒンズーたち』からの30年、『白い起伏』からの50年、平金有一にとってそれは、企業デザイナーとしての30年、そしてフリーの5年間をはさんだ、教育者としての15年でもある。その間実人生におけるさまざまな出会いをもつと共に、年を重ねるにつれて平金有一

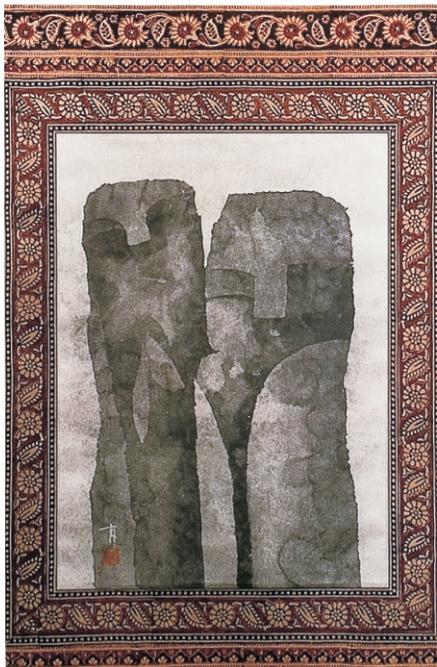


図3 祈、1993



図4 天空、2003

の作品世界は、身軽になり、透明度を増してゆく(図3『染色「祈」』、図4『染色額「天空」』)。そしてそれはまた平金有一の「出会い」と「出会いからの解放」の深化の軌跡でもあった。

2007年春、染織家平金有一は古希を前にしてなお「私の仕事はこれから始まる」と宣言する。

古希を前にしたこの宣言の融通無碍の力はどこから来るのか。『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)において、福岡伸一はシェーンハイマーの「身体構成成分の動的な状態」という考えに言及し、それは「生命とは(分子レベルにおけるあらゆる)代謝の持続的変化であり、この変化こそが生命の真の姿である」ということを意味していると指摘している。

また続いて北岡伸一はこの「動的状態」とエントロピーを関連づけ、「エントロピー増大の法則に抗う唯一の方法は、システムの耐久性と構造を強化することではなく、その仕組み自体を流れの中に置くことなのである。」と結論づけている。

「持続的変化」を自在に生き、「流れの中に」身を置く平金有一の仕事は「今から始まる」。